

明日への希望をつなぐ

# がん治療情報



2019年 7月16日発行

Vol.2

ご自由にお持ちください

**特集** がん治療の新たな扉が開いた——

## がんゲノム医療 元年



● 専門家に聞くがんの治療薬②

乳がんの薬物療法

虎の門病院 臨床腫瘍科 部長 高野利実

● 知っておきたいがん治療の知識②

主治医が理解してくれない？

セカンドオピニオンのコツは「論点整理」

認定NPO法人 がんサポートコミュニケーション理事長 渥美隆之

● がん治療の悩み相談室②

どう利用してる？「がん相談支援センター」

——患者さん・ご家族の本音トーク

● よりよい治療のためのこだわりを教えてください！①

今回のゲスト／ 国立がん研究センター中央病院 副院長 呼吸器内科長

大江裕一郎

● 治療中のよりよい暮らしのために②

大切なのは昼間の過ごし方！患者さんの「眠れない」解消法

杏林大学名誉教授 古賀良彦

ことばの処方箋／リレーエッセイ／Pick up! がんサバイバーキッチン

Contents

[巻頭 ことばの処方箋②]  
 病気であっても、病人ではない 樋野興夫 ..... 2

[特集]  
 がん治療の新たな扉が開いた—— がんゲノム医療 元年 ..... 4

[専門家に聞くがんの治療薬②]  
 乳がんの薬物療法 ..... 10  
 虎の門病院 臨床腫瘍科 部長 高野利実  
 新しく使えるようになったがんの新薬 ..... 13

[知っておきたいがん治療の知識②]  
 主治医が理解してくれない？  
 セカンドオピニオンのコツは「論点整理」 ..... 14  
 認定NPO法人 がんサポートコミュニティー理事長 渥美隆之

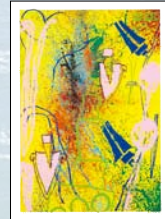
[がん治療の悩み相談室②]  
 どう利用して？「がん相談支援センター」 ..... 17  
 —— 患者さん・ご家族の本音トーク  
 国立がん研究センター及び都道府県がん診療連携拠点病院一覧 ..... 20

[治療中のよりよい暮らしのために②]  
 大切なのは昼間の過ごし方！患者さんの「眠れない」解消法 ..... 22  
 杏林大学名誉教授 古賀良彦

[リレーエッセイ②]  
 死の意識は生を充実させるか？ ..... 26  
 埼玉医科大学国際医療センター 精神腫瘍科 教授 大西秀樹

[よりよい治療のためのこだわりを教えてください！①]  
 嘘は絶対にいわない 患者さんと真摯に向き合う ..... 27  
 今回のゲスト 国立がん研究センター 中央病院 副院長 大江裕一郎  
 呼吸器内科長

[がんサバイバーと家族の食のお悩みを解決]  
 Pick up! がんサバイバーキッチン ..... 30



●表紙作品  
**「星への搭」／堀越千秋**  
 シルクスクリーン、87.5×61cm  
 Chiaki Horikoshi (1948-2016)  
 東京芸術大学大学院卒。マドリッドを拠点に活動し、世界各地で個展を開く。日本では、ANAの機内誌『翼の王国』の表紙絵や『週刊朝日』のエッセイなどで知られる。2014年、スペイン王国よりエンコミエンダ文民功労章を受章。18年、代表作を集めた『堀越千秋画集』（大原哲夫編集室）刊行。

全体監修／垣添忠生(公益財団法人日本対がん協会会長)  
 編集制作／笠井 篤(カサキキカク)  
 執筆／上村久留美、中出三重、山内章子  
 デザイン・イラスト／水田デザイン  
 撮影・写真協力／依田佳子、寺澤太郎、フォトライブラリー  
 コンテンツ協力／公益財団法人日本対がん協会、株式会社おいしい健康  
 印刷所／株式会社リーブルテック

発行者あいさつ

このたびは、株式会社アイロムグループが発行する、がん治療情報フリーマガジン『明日への希望をつなぐがん治療情報』Vol.2をお手にとっていただき、ありがとうございます。

当誌は、がん治療の最前線で活躍される医師や専門家の皆様のご支援・ご協力のもと、がんの治療や療養生活に役立つ、最新の情報をお届けする季刊情報マガジンです。

今号より、日本対がん協会会長で国立がんセンター名誉総長の垣添忠生先生に全体監修いただき、さらに患者様やご家族の皆様のお役に立つ情報を発信してまいります。

\*株式会社アイロムグループは、治験や臨床研究の支援(SMO)事業、iPS細胞作製などの最新技術を用いた先端医療事業で、すべての方の健康的な暮らしに貢献しています。

2019年7月



## 大西秀樹

埼玉医科大学国際医療センター  
精神腫瘍科 教授



1986年、横浜市立大学医学部卒業。藤沢病院、横浜市立大学、神奈川県立がんセンターなどを経て、埼玉医科大学国際医療センター精神腫瘍科教授に。精神保健指定医、日本精神神経学会専門医。

# 死の意識は生を充実させるか？



第25回日本臨床死生学会年次大会は2019年9月21～23日、国立がん研究センター新研究棟(中央区築地5-1-1)にて開催予定。

昭和61年6月、医師国家試験に合格した私は研修医としてスタートを切ることに。精神科医になるか、内科医になるか迷っていた私は、内科を最初の研修場所として選んだ。

病棟には肝硬変の患者さんが数多く入院していたが、そのほとんどは輸血が原因で発症した、いわゆる輸血後肝炎を長年患っている方々だった。肝硬変から肝臓がんを発症している人も多かった。当時、肝臓がんを発症した人の寿命はそう長いものではなかったと思う。

研修医の病棟業務として採血と点滴の当番があった。当番といっても研修医になりたての1年目は、医学部学生時代に針など刺したことのない者の集まりで、素人に等しい状況だった。だから失敗の連続だった。何度もやり直したこともある。申し訳ないことをしたと思う。

患者さんから怒られても仕方ない状況である。ただ、そこで怒られた記憶がないのだ。患者さんたちは、採血が成功するまで辛抱強く待ってくれた。先生、僕たちで練習して上手くなってね」と励ましてくれた人もいたし、1回で採血に成功したりすると「名手大西」などと笑って褒めてくれるとともに、成功を自分のことのように喜んでくれた患者さんもいた。

研修医の業務をほぼ終えた夕方、大部屋

の患者さんたちに話をしに行くと、彼らは部屋のカーテンを開けて何気ない話に花を咲かせた。よい時間だった。

彼らは、輸血さえしなければ肝硬変にならず、もっと自由な人生を送っていたはずだ。当時の医療の犠牲者といってもいい。しかし、彼らの口からそのようなことは一切聞かれなかった。彼らは、ベテラン医師から採血や点滴を受けたら、1度で済んだはずだ。しかし、研修医の私に何度も針を刺された彼らの口から苦情が出たことはなく、逆に若い私たちを励ましてくれた。彼らは、自分の行く先には死が待っていることを知っていたはずだ。しかし、若い医者のごくわずかの成長を心から喜んでくれた。彼らの生は、死を前にしてますます充実していた。彼らから教えてもらった。人は死を前にしても充実した生を送ることのできる存在だと。彼らの存在があったからこそ、私は医療者として成長し、死生学を専門とする精神科医として活動できているのだ。私の医療人としての原点だと思う。

今回、30年以上前の出来事を伝えることができた。死を前にしての充実した生は、世代を超えて伝えることのできる貴重な精神的遺産でもある。死生学を通して、生を充実させることの積み重ねの経験が、私たちの生をさらに豊かなものにするであろう。

※リレーエッセイは、第25回日本臨床死生学会年次大会とのコラボ企画です。